

白杖と声かけ葛藤の日々

いろいろな見え方を通じて 視覚障害の当事者から⑧

白杖とは視覚障害者が持つ白いつえのことで、周囲の情報を入手して身の安全を確保したり、視覚障害者であることを知らせたりします。私も障害者手帳を取得した2019年に購入したものの、なかなか出すことができずにカバンの中にずっと入れたままでした。「私は視覚障害者です」と言いながら歩いているような気持ちを受け入れられずにいたからです。

頭の中では、自分の身を守るためと相手の身を守るために使用した方が良いのは痛いほど分かっていましたが、「持たないと危ないよ」とか「道路交通法で持つように決められているんだよ」という言葉が一番嫌いでした。自分の中で葛藤が続いていた昨年末に「恋です！～ヤンキー君と白杖ガール～」というドラマが始まりました。弱視で盲学校に通う女の子がヤンキー君と恋愛をしながら、日々奮闘するという内容です。

放送があった水曜日の翌日は白杖に対する理解が深まっているように感じて、自然と使う勇気ができました。最初は週に1回から始まった白杖生活ですが、カフェでは、席までコーヒーを運んでもらえたり、歩いていると道をゆずってもらえたりと周りの方の温かさに触れることが多くなりました。

ただ、今でも当時の葛藤していた気持ちは忘れたくないと思っています。使う使わないはその人の人生だからです。それぞれのきっかけで始められたらと思います。

もう1つ感じることは、白杖歩行している視覚障害者に声かけする側の戸惑いです。どのように声をかけたらいいのかや、そもそも困っているのかどうか分からないという声を聞きます。当事者としては、見守ってもらって困ってそうだったら声かけをしてもらったり、信号が青に変わったときに教えてもらえたりすると助かります。

子どものころから視覚障害の方と絵本の読み聞かせなどを通じて交流し、社会にはいろんな人がいることを知ってもらうことが心のハードルを下げる一歩になるのではないかと思います。これからは、声かけしてもらったときには感謝の気持ちを形にした「サンキューカード」をお渡ししようと考えています。受け取った方に喜んでもらえたらうれしいです。

(山元正史、大分県網膜色素変性症協会会員) = 随時掲載 =



山元さんのホームページのQRコード